

SHOW HEY シネマルーム

★★★

イチかバチかー上海新事情

2004年・中国映画・87分

配給/徳間書店

2004 (平成16) 年7月4日鑑賞

<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004>

Data

監督: 王光利 (ワン・クワンリー)

出演: 張宝忠 (チャン・バオチョン)

／周玉華 (チョウ・ユイホア)

／鍾陵均 (チョン・リンチュ

ン) / 顧龍祥 (クー・ロンシ

ヤン) / 趙永生 (チャオ・

ヨンション) / 王建新 (ワ

ン・チエンシン)

👁️👁️ みどころ

「中国のインディペンデント映画」と名づけられたこの映画は、ズブの素人をスクリーンに登場させた。舞台は現代の上海。カネがすべて(?)の社会の中、国営会社をリストラされた主人公は、イチかバチかの大勝負に! 果たして宝くじの幸運は、彼らの上にほほえむのだろうか・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<舞台は現代の上海>

鄧小平による改革開放政策が始まった1978年以降、上海は急速な経済発展を遂げ、1992年の南巡講和により、さらにこれが加速された。そして、2004年の今、上海は北京、大連等とならんで、土地バブルが心配されるような加熱経済(?)の状況となっている。

他方、「社会主義市場経済」の驚異的な発展は、当然それまでの共産党独裁下における、国営企業の崩壊を生み、そこに勤める労働者の首切り(リストラ)という事態を生んだ。ちなみに、中国東北部の都市、瀋陽(昔の奉天)にある3つの国営工場が閉鎖されていく状況を、王兵(ワン・ビン)監督がドキュメントタッチで描いた映画が、9時間余に及ぶ『鉄西区』全3部作だ。

中国人は、全体的に商売上手。そして、自己主張も強い。これは、私たち日本人が日常実感することだ。上海を舞台として商売をやって儲ければ大きいものだが、本当の成功者はどれ位いるのか・・・? 成功するには、イチかバチかの賭けが必要・・・? この映画は、そんなダイナミックに動く現代の上海が舞台だ。

<登場人物はズブの素人ばかり>

この映画は、中国の「インディペンデント映画」と言われている。「インディペンデント映画」とは、一般的に「地下映画」といわれているが、その正確な定義は難しい。しかし、少なくともメジャーに対するマイナーという意味が含まれていることは確実。

この映画が、インディペンデント映画といわれるのは、その登場人物がすべて素人だから。すると、この映画の出演者の出演料は安いはずで、制作費もノカ安・・・？果たして、中国でこんなインディペンデント映画が、これからも育つのだろうか？

<主人公はリストラされた労働者>

この映画の主人公張宝忠（チャン・パオチョン）は、国营会社の江南造船所をリストラされた工場労働者。それでもスーツを着てネクタイをすると、それなりにパリッとしているから不思議（失礼・・・）。リストラされた後、自分の力で会社をおこすのは、それほど簡単なことではない。資金はもとより、従業員や物的施設等々、考えれば気の遠くなるようなことばかり。

しかし、本当に工場をリストラされた本人である、この映画の主人公張宝忠は、思い切りよく、タイトルどおり「イチカバチカ」の気持で、内装業を営む会社を立ちあげた。

<会社の社員たちは？>

張宝忠がまずやったのは、社員探し。まずは、経理をまかせることができる信頼できる人物として、同じように洋装工場をリストラされた女性の周玉華（チョウ・ユイホア）を指名。そして、①織物工場をリストラされたタクシー運転手の鍾陵均（チョン・リンチュン）、②修理工場をリストラされた顧龍祥（クー・ロンシャン）（シャオロン）、③ラジオ製造工場をリストラされた趙永生（チャオ・ヨンション）、④自動車工場をリストラされた王建新（ワン・チェンシン）（アーパオ）を次々と社員として採用し、まさにリストラ労働者集団による新会社がスタートした。

<最初から仕事はつまずき・・・>

うまい話はゴロゴロあっても、本当に儲かる仕事なんて少ないもの。信頼できる友人の紹介ということで、張宝忠が最初に受けた仕事は結構デカイものだったが、話を進めていくうちに、それがインチキということが判明。張宝忠は人を信用する「イケイケ派」だが、経理の女性周玉華は慎重派。そんな2人の積極性と消極性の議論の中、社員もサラリーマンなのか、下請け労働者なのかかわからないような仕事をこなすことによって、何とか会社を維持してきたが・・・。

<上海での宝クジ事情>

映画の中では、上海における大規模な宝クジキャンペーンのシーンが登場する。また、

テレビでもこれを大々的にとりあげている。1冊150元の宝クジで、最高100万円が当たるといふシステムだが、上海の労働者の平均賃金は月1500元程度とのこと。だから、その1割の金額の宝クジが飛ぶように売れるというのは、上海の人たちはよほどバクチ好きということか・・・？

<張宝忠が買ってきた宝クジは？>

張宝忠は、結構気前のいい社長。「遊び」だといって、社員1人1人にこの150元の宝クジを買ってきたが、何とこの宝クジが大当たり！！

そして、上海の宝クジは、当選した券の持ち主が会場に集まって、さらにルーレットを回し、100万円から30万円までのどれに当たるのかを競わせることによって、さらに宝クジファンの目を引きつけようという巧妙なシステム。そこで、真っ赤なシャツという「勝負服」に統一して、6人が会場に陣取った。そして、張宝忠が回したルーレットは・・・？

<この会社の未来は？>

この会社が請け負っている内装工事のやり方を見ていると、素人集団がやっているだけに、かなり危なっかしいものがある。しかし、それでも何とか仕事をこなしてきたし、「宝クジ大当たり！」のおかげもあって、今日までは会社は何とか回ってきた。

しかし、張宝忠のイケイケ路線と「対立」した周玉華は、会社をやめることに。さらに、タクシー運転手の鍾陵均も会社をやめて、運転手に戻ることに。これに対して張宝忠は、ポンと気前よく退職金を・・・。しかし、果たしてこんな状況で、この会社はうまく回っていくのだろうか？上海の経済のダイナミックな動きに対応できるのだろうか？そんな中、施工中のマンションに寝泊まりしていた、若い青年の宝クジにも大当たりが・・・。ホントに人生は「イチカバチカ」の大勝負・・・？

2004（平成16）年7月6日記